東京バッハ合唱団 月報

［第507，508号］ 2004年9月，10月合併号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-17-21-101 Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732
E-mail：bachchortokyo@aol.com http：//www2.tky.3Web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter Nos.507,508
September-October 2004
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

「カンタータ50曲選」全50冊、ついに完成

大村 恵美子

今秋発行の第5期全10冊をもって、「バッハ・カンタータ50曲選」シリーズは、完結いたします。

来る2005年と2006年の定期演奏会は、これらの楽譜を用いての上演であり、

BWV116, 129, 137, 147……2005年5月、第97回
BWV123, 192, 197……2005年12月、第98回
BWV180, 187, 194……2006年春予定、第99回

また、これらの会場録音は今後発行予定のＣＤ用音源となります。

楽譜発行 - 定期演奏会での上演 - ＣＤ化

この壮大な企画は、過去に収録した定演の音源をふくめて、私が指揮をはじめて、バッハの年代順作品連続演奏を組織的に実施した、1979年から2006年にいたる27年をかけての、合唱団のたゆみない歩みの結晶となりました。

以下に、「50曲選」への収録曲を、私たちの上演順に並べてふり返ってみます。

＜1979-1994年（13曲、50曲中の）＞
1979年 BWV131
1983年 BWV4, 80
1987年 BWV71
1988年 BWV6
1989年 BWV76
1991年 BWV42, 68
1993年 BWV39, 63, 196
1994年 BWV8, 104
（この間、1983年＝第1回、1988年＝第2回、1993年＝第3回と、ドイツへの演奏旅行を3回行なっている）

＜1997-2000年（13曲、50曲中の）＞
1997年 BWV21, 110, 150, 190
1998年 BWV19, 41, 45, 124
1999年 BWV84
2000年 BWV16, 56, 106, 156
（1997年＝第4回ドイツ演奏旅行）

＜2001-2006年（24曲、50曲中の）＞
2001年 BWV29, 36, 140
2002年 BWV61
2003年 BWV1, 26, 30, 40, 47
2004年 BWV72, 77, 78, 93, 99
2005年 BWV116, 123, 129, 137, 147, 192, 197
2006年 BWV180, 187, 194

「カンタータ50曲選」の楽譜を用いた演奏は、2000年の第87回定期演奏会からでした。その後、21世紀に入ってからは、すべて新しい楽譜の披露演奏となり、2003年からは、ライヴ録音のＣＤ発行も加わって、じつに2001年からの6年間では、「50曲選」の約半数、24曲が、楽譜・演奏・ＣＤと3つの形で世に出ることになったのです。

ＣＤ「50曲選」も、やがて2007年に完結すれば、私たちは3つの表現手段で、40数年間の東京バッハ合唱団の足跡を、後世に残すことになります。

2007年《マタイ受難曲》以後

これまでの成果では、教会カンタータ以外にも、オラトリオ、ミサ曲、受難曲、マニフィカト、モテット、世俗カンタータなどざっと20曲ほどの上演曲があり、これらをＣＤや楽譜として残せればすばらしいでしょう（《ミサ曲ロ短調》BWV232以外はすべて訳詞上演）。

しかし、私自身としては、初心の「教会カンタータ全曲」が、あくまでも生涯かけてめざしたい目標であることは言うまでもありません。

50曲だけでも、出版物として形に残すことは、長い間の夢にすぎなかったのですが、こうやって、大きな借財を引きずりながらも、確実に50曲の楽譜・ＣＤが現実のものとなった今、そしてまた、これもほとんど実現不可能の夢だった、教会カンタータ現存192曲の全訳が完成した今、私にとっては、どうしても「50曲選」以外の残る142曲の楽譜化へと、思いが向かってしまうのを抑えきれません。

今後の合唱団の演奏活動としては、「カンタータ50曲選」の楽譜を、まだ定演に用いていない曲が約半数ありますので、それらを次々に再演する楽しみがあります。

CONTENTS（9月, 10月合併号）

田川建三著『キリスト教思想への招待』の勝手な紹介 … 森井 眞 -2-
いまどき「武士道」流行は、やはり危ない — 新渡戸稲造『武士道』について …大村恵美子 -4-
メッセージ …アンドレーアス・パングリッツ -4-
曲目解説：カンタータ第72番《みなすべて 御心のままに》 -5-
野尻湖特別演奏会 … 佐々木まり子、中山ルミ子、山田隆康 -7-
後援会会計報告 -8-

しかし、合唱団だけでなく、もっと広い視野で考えれば、教会カンタータ全曲の日本語版楽譜を世に残すことが、いちばんの仕事ではないでしょうか。楽譜化されていない142曲のうち、すでに訳詞上演したもの61曲、残りの81曲が未上演ながら昨年までに訳稿を完成させたものです。

2003年7月に、全カンタータを訳し了えた時点で、私の訳詞の原稿は、楽譜上の全声部への書込みも出来あがっていました。しかし、「50曲選」の場合もそうですが、いざ楽譜上にデジタルデータとして入力していく段階で、さらに細部の訳し直し、シラブルの割りふりの改良などが具体化してくるものです。さいわいにして、「50曲選」では、他の出版社に依頼したのでは不可能な、この種のレベルの作業までが大村健二の手によってなされました。全曲の楽譜化に向かっても、技術的な問題はなさそうに思われます。

これに対する経済的裏づけ、また上演の可能性なども無視し、私の今後の活動能力も不問としながら、残りの142曲を、かりにBWV番号順に、10年間で楽譜化するというプロジェクトを考えるとします。2005年に未制作のBWV2ほか10数曲をもってスタートし、年平均14曲前後を制作しつづけると、2014年には、BWV199にいたる10数曲をもって完結することになります。

さいわい、種々の処理ソフトや機材の能力が次々に改良され、また需要数だけの印刷製本が安価に可能となる環境が実現されつつあるとは聞きますが、さてこのプロジェクト、どこまで実現するのでしょうか。

合唱団の2008年以降の演奏計画は、合唱団員主体でいずれ構想されることでしょう。現在の私の訳詞者の立場としての展望は、以上のとおりです。

田川建三著『キリスト教思想への招待』の勝手な紹介

森井 眞（団友・歴史家）

2004年3月初版、勁草書房.《 》内はすべて本書からの引用

「いまや『マルコ伝』は田川建三を措いては語れない」と新約学の泰斗、故エティエンヌ・トゥロクメがフランス新約学の学会誌に書いたのはかなり以前のこと。その田川は、いまや『マルコ伝』のみか、新約学全体について、広い世界で「措いては語れない」存在である。田川は、あまたの自称他称研究者のなかでも、その視野の広さ、洞察の深さ、知識の正確さにおいて抜群であるが、その思想の激しさと歯に衣着せぬ毒舌とに辟易してか、既成の信仰を守ろうとする小心な神学者やクリスチャンからは敬遠されている。彼は1980年に『イエスという男』を世に問い、弟子たちの手でイエスから遠ざかって作られていく正統的キリスト教を手厳しく批判したので、世間では田川はキリスト教なる宗教から脱出したのかと思われていた。しかし本書の後書きで、《あなたはクリスチャンですか、と質問される》と、たいていは《もちろん私はクリスチャンですよ、と答えることにしている》とある。クリスチャンとは何か私にはよく分らないが。

さて、キリスト教の歴史にはさまざまな過ちがあったとしても、これまで人類の役に立ってきたし現在もまた将来も役に立つと思われるすぐれた遺産もあり、本書はそのうちの二つ、創造信仰および隣人愛の問題と、またそのほかにキリスト教の重要な思想である救済論と終末論とをとりあげて、それを論じている。

１．創造信仰

神は天地万物を造った、という創造信仰は、キリスト教に限らずさまざまな宗教にみられる。したがって、20世紀にもてはやされたバルト神学者のように《キリスト教の専売特許にしがみつきたい人たち》は、自然について神を語る創造信仰を自然神学と名づけて毛嫌いした。しかし創造信仰は2世紀いらい19世紀までキリスト教信仰の中核をなしていたのであり、その信仰のおかげで人間は神の創造した自然の世界の圧倒的な大きさ、強さ、豊かさ、精巧さ、みごとさに感動しその恵みに感謝して、自分も被造物として自然の前に謙虚でありえたのだ、と彼はいう。

また、創造を了えた神は世界を「良しとした」。この世界は祝福され肯定されているのであり、キリスト教は、物質の世界を悪とする二元論と闘って、この世と積極的に関わって生きることを教えてくれたのである。

さらに、近代人は理性を偏重し感性を軽んじる。理づめでなく、もっと感性豊かな暖かさを、という人がある。しかし感性はその人の経験の範囲を越えられない。それに対して理性は、キリスト教ではまず神の事柄であり、世界は驚異にみちているがそこに働いているものは人知を超えた神の理性である。《人間にできることは、自然の秩序に従うこと》で、《暖かみを十分理解し尊重しようとする》ことこそ真の理性ではないか、という。

ところで、日本人は自然と調和する国民だが西洋人は自然を征服し支配しようとする、という人が少なくない。これはまったくの誤解であると、田川は都市の景観、都市近郊の森、庭園などをとり上げて、日本人がいかに自然から離れ、それにそむき、自然を軽視して平気で破壊しているか。それに対しキリスト教ヨーロッパでは今でも《自然に対して感謝して接し、自然の恵みを大切にするという姿勢が……生き生きと生きている。》《創造信仰の伝統なしには、現在の彼らのこの姿勢は考えられない》という。日本人の誤解の因は、創世記1章で、神が人間に地上のすべての生きものを支配せよと命じた、という句の取り方にあるのかもしれない。日本人は、だから西洋のキリスト教徒は自然を征服し支配しようとするのだ、というが、創世記1章は紀元前5、6百年かそれ以前、人類が農耕牧畜の段階に達して、申し訳ないが自分のために他の生きものや種を食べてしまって、それを神が許してくれるだろうか、と悩んでいたころの、農耕牧畜は神が良しとするのだという思想の表現である。われわれもまず《自然の大きさの前に謙虚になろう》と彼は書く。

（私、森井の所感。日本の問題はまったく同感である。日本人にも自然を慈しむ心はあると思うが、経済第一主義のいまの日本で、多くの人は金勘定を何より優先させて生きており、経済大国といわれながら私生活は貧しくて、もともと内を美しくして外を疎かにしがちといわれる日本人が、いよいよ身辺の外に配慮が広がらず、経済的にばかりか精神的にも貧しくなって、自然のみならず人間に対しても、真善美に対しても実に鈍感になっているのではないか。また、西洋といえばまずアメリカを考えるが、キリスト教西洋でもヨーロッパとアメリカとではずいぶん違うことがあるのではないか。）

▲この項の筆者・森井眞氏

2．隣人愛

キリスト教は愛の宗教だ、隣人愛の宗教だ、という。たとい偽善でありきざであっても、《自分たちは隣人愛を実践するのです、と宣言しておけば、……隣人に対して冷たく振舞うよりは、はるかにましだろう。》

最初期の教会は、使徒行伝４章によれば、会員が相互に助けあい支えあって「欠乏するものは一人もいなかった」という。それは現実ではなくて理想化された描写だろうけれど、「能力に応じて働き、必要に応じて消費する」というカール・マルクスの発想の基本はすでに原始キリスト教団の中で表現されていた、というのはキリスト教の手前みそではない。コンスタンティヌス大帝によってローマ帝国がキリスト教国となったあと、彼の甥で、キリスト教を嫌い、みずから帝位につくやキリスト教を国家の宗教とすることを放棄し、背教者と呼ばれたユリアノス（4世紀半ば）でさえ《他者に対する人間愛の実践とその救護事業》をキリスト教の長所の一つと認めている。そして、原始教会では助け合うのは小さな教団の内部だけのことだったが、ユリアノスのころになると相互扶助の実践は教団の枠をこえて「よそ者」に対しても及ぶようになっており、使徒行伝の理想は大きく飛躍して世の中すべての人々への助け合いになっていく。《人と人とが支えあう社会は、すべての人、……少なくとも大部分の人々がそうしたいと願ってみずからできる限りそのように生き、まわりの人もそのように生きられるように助け合う、そういう……力があらゆる場所で発揮されて……、その力の総合として……すべての人々のそういった自発的な力が十分に整って、それが何百年の伝統を》つくるのであり，その伝統のもとにはイエスの《思い出が残した影響》が考えられるのだ、という。

イエス自身は「愛」という単語を口にしていないが、たとえば葡萄畑の日雇い労働者の賃金のたとえ話で、終日だれにも雇ってもらえず、夕方になってようやく葡萄畑に来た人が、朝から一日中働いた人と同じ賃金を与えられること。また中世ヨーロッパでたいへん人気のあった、贅沢三昧のすえ金持ちなるがゆえに地獄に墜ちる金持ちと、貧乏なるがゆえに天国にのぼるラザロとの話。このような話にも影響されて、キリスト教ヨーロッパでは、中世には良心的な領主や金持ちや市民の自治体が、弱者を助ける施設や機関をつくり、こうしてヨーロッパのいたるところに中世の頃から施療院その他、弱者を支え助ける場所が設けられ、国が、病める者を無料で収容して癒し、職のない者をも養うなど、社会福祉の制度を整えていく。そのために当然多額の費用がかけられる。《要するに、自分たちの社会の中に、何らかの理由で、欠乏している人がいたら、それは自分たち全体で支えていかなければならない、という精神》、その「自分たち」の範囲も、小さな教団から始まって、その意識は地域に、国に、そして世界中にひろがろうとする。《この意識の出発点には、明瞭に、かつてイエスが語った話がある》というのである。

3．救い

古代人は《人間を超えた力として、善なる神のほかに、神と拮抗する力として、「罪」ないし悪魔的な力を想定》し、「罪」すなわち《個々の人間を超えた、全人類を支配する、超越的な悪の力》から解放されることを願った。

地中海世界の神殿宗教は、祭壇に犠牲獣を捧げて神が罪から人間を買い戻してくれることを祈ったが、人間が考え出した神々は犠牲獣の血を求める程度のちゃちな神々にすぎず、信徒の寄進は神殿に巣くう者らを潤すばかり。くりかえし行なわねばならない供犠は費用のかさむ煩わしい営みだったが、それでも人々は生の不安から逃れるために宗教に頼らざるをえなかった。そんなところにキリスト教がやってきた。

イエスが死刑にされたとき、弟子たちはイエスの死を自分たちのための死として位置づけようとした。そして、イエスの死は神自身が犠牲獣の代わりに神の子を犠牲にしてくれたことであり、その１回限りの犠牲で人間が無料で罪から解放されたのだ、と解釈した。そしてパウロらは、親鸞のように絶対他力の信仰に行きつき、自分は犠牲を捧げることなく、犠牲にされたイエスによって人間は救われる、という信仰が生まれた。こうして、キリスト教の救済論は人々を諸宗教から解放した。

▶田川建三氏

東京バッハ合唱団創立35周年懇親会にて記念講演．
左上の写真とも（1997年7月5日，本郷・学士会館）

しかし、《人々の心の中にうさんくさい神々を信じたいという気持ちが残っている限りは、人々はそう簡単には宗教から解放されない》。4世紀にキリスト教がローマの国教となるや、《いったんやめてしまったさまざまな神々への儀礼、信心、祭儀、等々がわっとばかりに復活してくる》。そして神々に代わって聖者崇拝、とくにマリヤ信仰がつくられ、そのような聖者崇拝から16世紀の宗教改革はキリスト教を解放するが、そのプロテスタントもほどなく正統主義にとじこもり、《おどろおどろしいドグマを大量に並べ立てて、それで信者を拘束しようとした》。それよりはむしろ大らかだったカトリックも19世紀後半から20世紀前半にかけて目立って右傾化する。フランス革命のときには世をあげて宗教から解放されようとし、フランスではかなり徹底した政教分離が実現した。また組織的に無宗教化をはかったソ連邦は、それを独裁的な国家権力によって実現しようとし、人々は逆に宗教に走っている。

人類はそろそろ宗教そのものから解放されてよい段階にきたかと思われるが、《この社会がこれまで宗教に担わせてきたさまざまな良きものを、もはや宗教に押し付けることなく、みずからの手で直接担うようになってはじめて、我々は、もう宗教なんぞいらない、と言える資格を手に入れる》ので、それまでには《まだ数百年ぐらいかかるかしらん。》

4．終末論

現世では、とても許しがたいような理不尽なことがしばしばおこなわれる。果たしてこのままでいいのだろうか。人間が復讐しないのなら神がやってくれねば。現世で栄えた悪者

が裁かれ、矛盾に決着がつけられ、救いが完成する終末のときがこなければ……。

イエス自身は終末信仰とは無縁だったが、当時のユダヤ教徒全体には、終末の直前に天変地異が起こるという思想は共通しており、マルコもそれを信じているが、最後の審判については何も書いていない。マタイは終末論の思想が全体をとおして基礎に置かれ、最後の審判を重要視して、そこでその人がどのように生きたかが問われる、という。そして終末論の思想のなかでも、最後の審判の要素だけを強調した。ルカは終末論の思想は遠く、宗教教派絶対主義で、クリスチャンになりさえすれば永遠の生命が与えられる、と信じこんでいる。

《私にしたところで、腹の底では、死んだらそれで自分の存在はまったく消滅するのだ、自分だけでなく、誰しもそうなのだ、と十分に自覚はしているけれども、親しい人が自分に先立って亡くなると、嘘とは知りつつ、いずれ自分も死んだら、その人と天国でまた会うことにしましょう、と、少なくとも口先では、気慰めに言うことにしている。たとい嘘でも、その種の夢はお互いに口にした方がよろしい》と。

新約の著者のなかで、パウロだけは自分がまだ生きているうちに終末が到来して、自分は生きたまま天に連れて行かれると信じていた。しかし終末は来なかった。それ以来今日まで、いかに多くの人が終末を予言してきたことか。

終末論を細かに描いた『ヨハネ黙示録』を本書はとりあげて解説するが、ここでは省略する。宗教的救済のことしか考えていなかったパウロと異なり、この世界の現実を広く、正確に、鋭く見ていた『黙示録』の著者は、ユダヤ教黙示文学のしきたりに従って一種の文学遊びを楽しみながら《ローマ帝国によって抑圧、弾圧されたすべての人間》のことを思い、ローマの崩壊、滅亡を何度もくりかえし叫ぶ。滅ぶべきはローマであり、『黙示録』はすさまじい憎悪と怨念の書であるが、その内容はどこの教会にも彫刻や壁画で描かれ、それをとおして《人々は、此の世を支配している悪い奴らは、最後にはきっとこのような仕方で神様に滅ぼされるぞ、と信じつづけてきた》。

田川は最後に、《どうか二度とこういう本が書かれることがありませんように》という。《そのためには世の中が、黙示録なんぞ必要としない世の中になっていないといけない》。そして、《人類がみずからの手でみずからを滅ぼしつくすのが先か、黙示録が書かれなくてすむ世の中が到来するのが先か》と結んでいる。

（まことに面白く楽しく読みやすいが、重要な問題提起の書。さまざまな立場、さまざまなお考えの方に、ご一読をおすすめする。）

メッセージ

大村恵美子様

バッハ・カンタータのＣＤ録音をお送り下さいましてありがとうございました。心からお礼申し上げます。ご業績には深い感銘を覚えました。バッハのカンタータの古風ともいうべきドイツ語テクストの翻訳にはじまり、日本語に置き換えられたテクストを音楽的な表現にもたらすまでの一連の作業を、あなたは成し遂げられました。

2004年8月12日、アーヘンにて

アンドレーアス・パングリッツ
（神学者・ボンヘッファー研究家）

いまどき「武士道」流行は、やはり危ない

― 新渡戸稲造『武士道』について

大村 恵美子

自衛隊代表が、武士道を体して行ってまいります、と挨拶してイラクに出かけて行く。アメリカ映画『ラスト・サムライ』その他の影響か、武士道は世界的にブームとなっているらしい。

先日、ある駅のプラットフォームのキオスクで、新渡戸稲造『武士道』が置いてあるのを見かけて、それほどまでに読まれているのかと実感し、うちの本棚の奥から引っぱり出して読み返してみた。

この著書は、1899年、アメリカで療養中の著者が、日本文化を世界に弁明しながら広めようとして書いた。キリスト教に帰依し、世界的な視野に立った彼が、日清戦争の４年後、日露戦争の５年前という時点で、「武士道はわが国の活動精神、運動力であったし、また現にそうである」「日本の変貌は全世界周知の事実である。かかる大規模の事業にはおのずから各種の動力が入りこんだが、しかしもしその主たるものを挙げんとせば、何人も武士道を挙ぐるに躊躇しないであろう」「今日までのところキリスト教伝道が新日本の性格形成上貢献したるところはほとんど見られない。否、善かれ悪しかれ吾人を動かしたものは純粋無雑の武士道であった」として、過去、現在、将来にわたる日本のバックボーンたるべき武士道を称揚している。

武士道のよいところ

新渡戸は、単に武士道を誇ることに終始しているのではなく、公平であろうとして批判もしている。「わが国民の欠点短所に対しても武士道が大いに責任あることを承認するは公平である」「わが国民が深遠な哲学を欠くことの原因は――武士道の教育制度において形而上学の訓練を閑却せしことに求められる」「感情に過ぎ、事に激しやすき性質に対しては、我々の名誉欲に責任がある」「自負尊大がわが国民にありとすれば、それもまた名誉心の病的結果である」と反省しつつも、武士道が今後も生きのびることを期している。

「社会の状態が変化して武士道に反対なるのみでなく敵対的とさえなりたる今日は、その名誉ある葬送の準備をなすべき時である」とさえ言うのだが、欧米渡来のキリスト教が、武士道を経て本来の福音に立ち帰ることを期待しているようである。

「アメリカ的もしくはイギリス的形式のキリスト教――キリストの恩寵と純粋よりもむしろより多くのアングロ・サクソン的恣意妄想を含むキリスト教――は、武士道の幹に接木（つぎき）するには貧弱なる芽である」「日本人の心によって証せられかつ領解せられたるものとしての神の国の種子は、その花を武士道に咲かせた」「武士道は特に治者・公人および国民の道徳的行為に重きを置いた。これに反しキリストの道徳はほとんど専ら個人、ならびに個人的にキリストを信ずる者に関するものであるから、個人主義が道徳的要素たる資格において勢力を増すにしたがい、実際的適用の範囲を拡大するであろう」「武士道は一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない、しかしその力は地上より滅びないであろう」「四方の風に散りたる後もなおその香気をもって人生を豊富にし、

人類を祝福するであろう」。
　さて、この『武士道』全篇で、多くの日本史の有名なエピソードを想起させながら説かれているのは、私たちのよく知っている「古き良き日本」であって、私たちにも親しい気持で受け入れられるものである。たとえば、戦闘におけるフェアプレイ、誠実、卑劣臆病をさげすむ、平静心、ストイックな沈着、不可避に対する静かな服従、正義・勇気をもって自己を絶対と調和させる、慈愛、寛容、同情、憐憫、柔和、弱者・劣者・敗者に対する仁、音楽・文学をたしなむ（残忍性をなくす)、謙譲・慇懃（他人の感情を尊敬)、礼を重んじ虚礼を排し、優雅な作法による身体と環境・肉体と精神の調和（最善・最美の道の探求)。たとえば茶の湯などで、心の平静、感情の明澄、挙止の物静かさを学ぶことで、正しい思索と正しい感情の第一要件を求める、等。
　どれもみんな、りっぱなことに違いない。

◂端午の節句（5月5日）の兜飾り

危惧すべきところ
　しかし、これらを、新渡戸自身は、公平を期そうとして、キリスト教や他の諸国の文化・歴史に見られる様々な例と比較しているが、どうしても日本を世に理解してもらいたい気持から、他より優越的に表現されやすい。これほど高いのは日本独自のもので、他にはないだろう、という思い込みが見え隠れして、凡人にはたやすく「日本が一番」の得意に引きずり込まれかねない。
　第一に、これは、戦闘(殺し合い)を職業とする武士という特権階級から出たもので、主従の道に則り、父権政治に律されている。女性は服従する性であり、家とともに男性に所属する。重んじられるのは主君、祖先、親であり、この国土に君臨する天皇であって、大事なのは愛国心、忠義である。天皇・君主は、臣下に対して相互的義務は負わない。国家は個人に優先し、個人の生命も差し出すことが要求される。経済は軽視され、貧困が尚ばれ、金に頓着することはさげすまれる。名誉のためには、自己犠牲をもって仕え、切腹も、武士が罪を償い、過ちを謝し、恥を免れ、友を贖い、もしくは自己の誠実を証明するための、洗練された自殺の方法だった。「封建制度の子たる武士道の光は、その母たる制度の死にし後にも生き残って、今なお我々の道徳の道を照らしている。」
　こうして挙げてみると、この数年のうちに著しく、着々と息を吹き返している、「新しい歴史教科書をつくる会」などの、日本の古層のたくましい主張と政治への進出が、この小著によって短絡的にしっかりと裏打ちされているように思われてくる。また、キリスト教の普遍的な教えが、あちらこちらに引用されているが、私にはそれらが、決定的なところでどうにもずれている感じがしてならない。たとえば、「一粒の麦…もし死なば、多くの果(み)を結ぶべし」「まず神の国と神の義とを求めよ、さらばすべてこれらの物は汝らに加えらるべし」（この、ほんの2ページ前では、「天皇は地上において肉身をもちたもう天の代表者であり、天の力と仁愛とを御一身に兼備したもう」と明言されている)。
「わがため己が生命を失う者はこれを救わん」「柔和なる者は地を嗣がん」「神の国は汝らの中にあり」。
　新渡戸稲造は、「武士道の究極の理想は結局平和であった」「武士道は刀の正当なる使用を大いに重んじたるごとく、その濫用を非としかつ憎んだ」と言って、キリスト教の平和主義との調和を試みた。1899年の時点で、これだけ公平に世界を見渡し、宗教の究極を探ろうとした彼の卓見は、今日でも大きな自信を、私たちに与えてくれる。そのことは疑いないが、自衛隊をイラクに送り出している現在の状況で、この本が駅のキオスクにまで置かれる現象には、やはり危惧を感じないではいられない。
　政府寄りのコメンテイターたちの間では、近頃しきりと、日本国民の良識とか平衡感覚とかが持ちあげられて、重大な政策がことごとく世論で二分されることを、「民意に反しても決断してきた自民党半世紀の良政」に結びつけようとしている。このようなオピニオンリーダーたちにマスコミが追随している現状では、司馬遼太郎も、新渡戸稲造も、高い評価を得てきたどれもこれも、自分自身の厳密なフィルターを駆使してよく濾過してみなければ、すべて危いことになるのである。日本国民は利口、賢明、優秀（だから政府を裏切らないとでも？）とのほめ言葉を、警戒しよう。

演奏曲目解説

次回定期演奏会（第96回、12月12日）上演曲

カンタータ第72番
《みなすべて 御心のままに》
Alles nur nach Gottes Willen
訳詞と解説：大村恵美子

【歌詞】
1. 合唱
みな すべて み心のままに
喜び 悲しみ いかなる 時も
悪しき おり 良き おり にも.
わが 魂を 鎮(しず)む み心は
暗き 日も 晴れ にも.
みな すべて み心の ままに
これぞ わが 道

2. レチタティーヴォ, アリオーゾ, アリア（アルト）
おお 幸なる 主に つける 者
み手に ゆだね
いかなる 時も 励む 者は.
　主により すべては 成るべし
　主により われ 満ちたれり
　主により 悩みは 失せん

主により われ 浄(きよ)められん
主により 喜び 生まれん
主により いばらも 糧(かて)と ならん
主により 安きに 入らん
主により み言葉 いのちを 得ん
わが 魂 鎮められん
主により 死する こと なし
肉の いのち 離れ去る とも
み言葉 生きん

(アリア)
わが もてる すべてを
われは 捧げまつる イェスに
わが 弱き 思い
主の 貴(とうと)き み心 悟らざれど
いばらを 通りて 花咲く 道へと
主は たえせず われを 導きたまわん

3. レチタティーヴォ（バス）
信ぜよ
み言葉を:
われは 恵みの 手を
伸べて 救わん
怖れ まどう なれを.
悩みを 知り
そを 解き放つ
弱きを 強め ささえ
貧しき 家に 入り
恵みに 満たすべし

4. アリア（ソプラノ）
主 為(な)したまわん. なが 十字架を やわらげん
なが 心 うれいに 沈むとも
やさしき 主の 腕(かいな)に なれは 憩わん
信仰は 悟る 主は 為したまわんと

5. コラール
み心は つねに
成し遂げらる
よりたのむ 者を
主は 導きたもう
悩み より 救い
悪しきを こらし
主に いしずえ 置く 者を
見棄てじ

【解説】
初演：1726年1月27日（顕現節後第3日曜日），ライプツィヒ.

独唱はソプラノ，アルト，バス；楽器編成はオーボエ2本に弦合奏，通奏低音のみ；演奏時間約 20分の，素朴なカンタータだが，この冒頭合唱が《小ミサ曲ト短調》BWV245第2曲〈グローリア〉に 転用されていることで名高い.

この日（顕現節後第3日曜日）の福音書章句はマタイ8:1-13で，信仰をもってイェスを頼る者にあらわれる癒しの奇蹟が主題となっている．物語がそのまま歌詞になってはいないが，冒頭の〈みなすべて み心のままに〉という，静かでしかも確固とした神への信頼が，全曲を貫いている.

1.〈喜び 悲しみ いかなる時も〉
2.〈主により すべては成るべし〉
3.〈信ぜよ み言葉を：われは…救わん〉
4.〈信仰は悟る 主は為したまわんと〉
5.〈み心は つねに成し遂げらる〉

この一貫した態度が，このカンタータを親密で心ひきつける作品としている.

1.合唱
ザーロモ・フランクの詞〈みなすべて み心のままに〉が，オーケストラ前奏につづいてトゥッティの形で始まり，〈みなすべて〉“Alles, alles“ が絶え間なくくり返される．弦が16分音符のパッセージを休みなく走らせ，中間部〈わが魂を鎮む〉にいたって，簡素な和音伴奏にきりかわる．〈暗き日も晴れにも〉から冒頭の調子が再現し，〈み心のままにこれぞわが道〉と終らせる．安定した信従の心の表現である.

2. レチタティーヴォ，アリオーゾ，アリア（アルト）
全曲中の中心をなす，念の入ったアルト独唱である．まず，〈おお 幸なる〉とレチタティーヴォが始まり，アリオーゾで〈主により〉“Herr, so du willt“ を9回反復しながら，信ずる者の人生を描く．ふたたび3小節の短いレチタティーヴォののち，ヴィヴァーチェのアリアとなる．弦の活発な間奏，後奏と交替しながら，アルトが，献身と神の導きを，変化に富む歌で表現してゆく.

3. レチタティーヴォ（バス）
信ずる者を強め，支える神に依りたのむようにとすすめ，励ます，セッコ・レチタティーヴォ.

4. アリア（ソプラノ）
オーボエとソプラノが寄り添いながら，慰めの主の腕(かいな)に憩う至福を，ポロネーズ風なリズムの，明るく楽しげな調子で歌う.

5. コラール
ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト詞〈み心はつねに成し遂げらる〉(Albrecht von Brandenburg „Was mein Gott will, das g’scheh allzeit“ 1547) 第1節.

このコラールは，《マタイ受難曲》第25曲としてとり入れられ，ゲツセマネで祈るイェスの姿を鮮明に浮き出させることで，有名である.

冒頭合唱が《小ミサ曲ト短調》の〈グローリア〉となり，最終コラールが《マタイ受難曲》中の重要なコラールとなっていることで，このカンタータは，それら2作品の緊迫感とともに深みと親しみをおぼえさせるように思われる.

♯

野尻湖 2004

世田谷と野尻湖での特別演奏会

中山 ルミ子（団員：アルト）

パート斉唱で独唱曲を演奏

昨年にひきつづき今年も、世田谷中央教会において、7月31日（土）、「教会カンタータの夕べ」が催されました。光野孝子先生のソプラノ独唱と私たちの合唱による BWV93、BWV77、BWV78の3曲を演奏しました。これら3曲のカンタータは何れも5月定演で演奏したものですが、今回はBWV93のS-A二重唱、BWV78のS-A二重唱、Tアリア、Bアリアの4曲が、私たちの演奏として新しく加わりました。これらは本来ソロ用の曲で、一人で歌うにはかなり力量を要するのですが、各パート全員がお互いに補い合うことによって、ソリストほどの力がなくても、なんとか演奏が可能になりました。

パート斉唱は全体のバランス、テンポ、響きなど揃っていたでしょうか……、定演でソリストたちの卓越した演奏を聴く時とは違った聴き方で楽しめる(?)ことが、この特別演奏会の良さだと思います。

ソリスト2名参加の豪華な夏合宿

今年の合宿は、定演でいつもご出演くださっているソリストの光野孝子（ソプラノ）、佐々木まり子（アルト）両先生がお忙しいなかご参加くださり、上記演奏会の翌週8月5日（木）から8日（日）、野尻湖の爽やかな風のなかで3泊4日の行動を共にさせていただきました。

合宿第1日目の夕食後の練習は、光野先生による全体の発声練習のあと、一人ずつ発声指導を受けることになりました。普段すこしは自信のある声のはずなのに、大勢の前での個人レッスンは初めてで、皆一斉に「聴かれるのが恥ずかしい」と、予定外の事態に大慌てでした。レッスンは一人5分程度でそれぞれの欠点を指摘、適切なアドバイスを受けました。終わってみれば「恥ずかしかったけれど受けて良かった」「勉強になった」と異口同音の感想でした。2日目夜のアルトの部屋はこの話題を中心に良い合唱、響きを揃えるための真面目な話で盛り上がりました。

佐々木まり子先生からは、2日目午後にBWV78を時間をかけて丁寧にご指導いただきました。ある程度曲として仕上がっていましたが、細かなアドバイスがより良い音色、より柔らかい響きを作り上げさせてくださったように思います。

今年の神山教会特別演奏会（8月7日、19時開演）のハイライトである、2曲のソロカンタータ BWV35 と BWV 170は、ともに大曲かつ難曲で、先生ご自身も「この選曲はハードでした」とおっしゃりながらも、本番はいつもの伸びのある声で見事な演奏、内山亜希さんのピアノとも絶妙の掛け合いで、聴衆は美しい音楽に酔い、見事な演奏に感動しました。

演奏会が無事終了して午後9時過ぎにホテルに戻り、心尽くしのご馳走の品々と飲み物でにぎやかに歓談したり、ビデオを見たり、和やかな会話が夜遅くまでつづきました。

また、合宿直前までの多忙な日々で相当お疲れのご様子だったにもかかわらず、途中で席を去られることなく、最後のお開きまで団員たちとの歓談にお付き合いくださり、交流を深めてくださった両先生方、本当にありがとうございました。本番やオケ合わせとは違って、リラックスした時間と空間をともに過ごさせていただいたことを嬉しく思います。

最後に、合宿に向かう新幹線で、はからずも佐々木先生と座席が隣り合わせになり、大宮から長野までの1時間10分、ご一緒させていただきました。後から考えると、本番に備えて休養されるおつもりではなかったかと反省しきりなのですが、貴重なお話を色々とうかがうことができました。ありがとうございました。

バッハ合唱団の皆様

佐々木 まり子（団友・声楽家）

横浜の実家にて、買い物や料理を母と共にしたりして、昨夜（9日）8時ごろ盛岡に帰ってまいりました。

このたびは、大村先生ご夫妻、バッハ合唱団の皆様と共に、まるで修学旅行の生徒のように、さまざまなスケジュールをご一緒し、しかも有意義で充実度たっぷりの内容で、心いっぱい満たされて、本当にありがとうございました。

神山教会の素朴な造りと雰囲気のなかで、アルト・ソロカンタータを、しかも入場無料で歌えたこと、とても幸せでした。‘ドイツ語の歌詞の内容 → 恵美子先生の訳詩’が真実であること、歌う者（私）はいつも喜んでさえいればよいのだということも、改めて教えられました。

野尻湖、周辺の美しさ、山々が目にしっかりと焼きついております。余韻を楽しみます。

まだまだ暑さ厳しき折、お体大切に。8月はオフということのようですので、十分ご休養ください。

野尻湖合宿 ― 贅沢な時間

山田 隆康 （団員：バス，2004年5月入団）

8月4日（水） 明日は野尻湖合宿だ。きっぱりと仕事を切り上げて、旅行の準備。

8月5日（木） 天気良し。東京駅を上越新幹線で出発。横川名物釜飯弁当を買う。懐かしいなー。早、霧の軽井沢駅を過ぎ、長野着。信越線ホームで橋本さんに会う。暫し音楽談義。野尻湖は結構暑いとの情報。黒姫駅で下車。皆さんと合流。迎えのバスで野尻湖レークサイドホテルに向かう。バスの森永さんと同室。早速、手漕ぎボートで弁天島一周。湖上は涼しく、オール漕ぎ漕ぎ合唱団の歴史などを伺う。教会でのコンサートのポスター貼りに自転車で同行。福井大学のカヌー合宿の学生さんが多数同宿賑やか。おいしく夕食を戴き、つい生ビールも少々、上機嫌。夜、湖上のルビーホールでいざ練習。光野先生が一人一人にボイストレーニングをなさり、皆さん大感激。私も初めての経験で大感激でした。腹式呼吸のご指導では、先生の横隔膜の動きを確認させて頂きました。後ろわき腹のあたりが膨らんでいる。橋本さんがいつもご指導されているように、鼻から吸う時は、花の良い香りを嗅ぐように吸いなさいとのご指導がありました。

8月6日（金） 午前、光野先生の発声練習。昨日ボイトレを受けられなかった方も受講し、ふたたび感激。午後、佐々木まり子先生ご到着。佐々木先生の発声ご指導を受け、またまた大感激。膝を少し曲げ、高音域の発声になるほど腰を下げるよう意識するようにとのご指導がありました。カンタータ78番、ミニコンサートで歌う〈気晴らしにタバコを詰め（パイプの歌）〉のご指導あり。その後、佐々木先生のリハーサル練習を拝聴。夜、ミニコンサート。皆様素敵でした。

8月7日（土） 午前、発声練習。大村恵美子先生より、歌の上達、発達を妨げている各人の「因習」を打ち破ろうとのお話あり。午後、光野先生、橋本さんと私で白鳥ボートを漕ぐ。先生は真ん中に陣取り楽しそう。弁天島に上陸し、宇賀神社に参拝。演奏会の成功、参加者全員の無事を祈願いたしました。午後7時過ぎより森の良い香りに包まれた神山教会で演奏会。内山さんのピアノで、佐々木先生がカンタータ35番《心は乱れ惑う》、カンタータ170番《うれしき心の平和》の2曲を独唱なさいました。すばらしい演奏でした。合唱団に光野先生も加わられて、橋本さんの指揮でカンタータ78番《イェス わが心を》を演奏。聴衆の方々も満ち足りた様子でした。

8月8日（日） 大村先生、佐々木先生に同行し、野尻湖周遊。途中、橋本さんの代わりに宇賀神社にお礼参りをいたしました。一茶記念館に立ち寄った後、東京へ。

以上、合宿の風景をお伝えしました。自然に包まれ、諸先生のご指導を受け、大好きなバッハの音楽を拝聴し、歌い、団員の皆様の成熟した空気に触れ、日々の緊張もゆっくりと溶けて行った私にとって貴重な4日間でした。こんなに贅沢な時間は今までありませんでした。今回の経験を「心の宝」にして、この一年最善を尽くそうと内心わくわくしています。大村先生、皆様本当にありがとうございました。

♯